

新しいレールを敷く。 北海道でつくる ジェンダーコレクティブ

公益財団法人

さっぽろ青少年女性活動協会

北海道で、ジェンダー平等はどこまで進んでいるのか―。

都道府県版ジェンダーギャップ指数は3分野で最下位の47位と、厳しい現実が突きつけられ、社会構造としてのジェンダー不平等が根強く残っていることを示している。そんな課題に40年にわたり向き合ってきたのが、

公益財団法人「さっぽろ青少年女性活動協会」だ。婦人文化センターから女性センター、そして現・札幌市男女共同参画センターの運営と、

時代の変化をくぐり抜けながら、相談支援と学びの場を支えてきた。現在は、相談や啓発といった「点」の取り組みにとどまらず、

営利・非営利、企業・NPO、市民活動などセクターを横断し、戦略的にジェンダー課題へアプローチする場「ジェンダー・コレクティブ北海道」を展開する。その場を活用して、道内の団体や個人がすでに行っているアクションを

称える「NEW RAIL AWARD」を開催するなど、長年培ってきたネットワークを基盤に、多様なステークホルダーを結びプラットフォームづくりに取り組む。分断ではなく、つながりを。

ジェンダー平等社会に向けた新しい道を、切り拓こうとしている。

ジェンダー平等の取り組みを オープンにする

2025年12月、北海道札幌市の地下通路のオープンスペースに、次々と人が集まっていく。立ち止まる通行人に足早に通り返りながら振り返る人、スーツ姿の企業担当者や学生、NPOスタッフ、行政職員。所属や年代が異なる人たちが、一つのステージを取り囲む。

ジェンダー課題解決に向けたアクションをしている人や団体を表彰する道内初のイベント「NEW RAIL AWARD」。北海道の各地で続けられてきたさまざまな取り組みが、一堂に会した。ジェンダー課題に向き合う道内の実践を公募し、共有することを通して点在していた取り組みを、つなぎ、交差させることを目的としているのだという。

「閉じた会議室ではなく、誰もが目にできるオープンスペースを会場にして、通行者の方にも見てもらえるようにしました」と仕掛けを話すのは、さっぽろ青少年女性活動協会で、ジェンダー・コレクティブ北海道の橋本彩加さんだ。「ジェンダーと聞くと、難しいとか怖いとか、どこか自分とは遠いもののように捉えている方がまだ多いと感じています。本当は私たちの日常の中にあるテーマなのですが、自分ごととして捉えにくい側面があるのかもしれない」。だからこそ、オープンな場所で開催することに意味がある。「ふらっと立ち寄って、なんと



イベントに関心を寄せて足を止める通行人の姿

く話を聞いてみる。そこで知るきっかけが生まれること自体が、とても大切なのではないだろうか。ジェンダーを特別な議論として閉じるのではなく、暮らしの延長線上にあるテーマとして届けていく。そうしたアプローチが、これからはますます必要になると思っています」



NEW RAIL AWARDの受賞者

自然とつながりが生まれた表彰式

NEW RAIL AWARDでは、広大な北

海道の各地の企業、自治体、NPO、ユース、個人から、ジェンダー課題解決の事例を募集するアクション部門60事例、ジェンダーの気づきを促す動画・写真コンクール部門59作品のエントリーがあった。エントリー団体や作品は、北海道を中心に活動するジェンダーの専門家らが、挑戦を始めたばかりの「チャレンジ」、他の企業や団体、市民や若者に希望を与える「エンパワリング」、社会に大きな変化をもたらした「インパクト」の三つの区分で評価し、表彰する。

会場では授与式、受賞作品の上映、そして受賞者による3分間ピッチが続く。子育て世代でも働きやすい職場や、LGBTQA+の当事者による学生団体など、登壇者たちは短い時間の中で、



北海道、「北海道ジェンダーベースド・プラットフォーム構築事業―営利セクターと非営利セクターをジェンダーでつなげる」

<https://syaa.jp/>



(左から)菅原亜都子さん、橋本彩加さん
(2026年2月9日最終発表会参加者)

それぞれの現場の成果だけでなく、葛藤も合わせて語った。ステージの外では、「一緒にできることがあるかもしれない」「次はうちの地域でやろう」「社内で紹介したい」といった自然発生的な対話が生まれる。そんな輪が広がり、若者と経営者が語り合い、自治体職員とNPOが次の企画を相談する。表彰として可視化されたことで、動き始めたつながりがあった。

これまで各地で静かに続けられてきた実践は、互いの存在を知らないまま、点のままで存在していた。NEW RAIL AWARDは、その点を線にし、線をつなぐ試みだった。

北海道で、何が起きているのか

「地域からジェンダー平等研究会」がまとめた都道府県版ジェンダー・ギャップ指数2025年によると、北海道は行政、教育、経済の3分野で最下位だった。意思決定の場に女性が少なく、経済参画も低い。地域社会や企業の中で、固定的な役割意識が依然として根強く残っている現状が浮き彫りになっている。また、新型コロナウイルス以降、北海道から道外へ転出する女性が増加している。札幌は道内の若者を吸収する都市でありながら、同時に20代女性を東京へ送り出す「中継地点」にもなっている。と、さっぽろ青少年女性活動協会では、ジェンダー・コレクティブ北海道



さっぽろ青少年女性活動協会の菅原亜都子さん

の菅原亜都子さんは話す。「女性たちが去っていつているというのは、単なる人口移動ではないと思っています。ここにおいても自分らしくいられない、公正な扱いを受けられないと感じて、北海道を諦めているのではないかと考えました」

もし、若い女性が地域を離れる背景にジェンダー構造があるのだとすれば、それは一部だけの課題ではない。北海道全体の持続可能性に関わる問題である。ただ、広大な北海道のジェンダー課題は単一ではない。

見えている景色の違い

長年、札幌市男女共同参画センターの運営を担ってきた視点から見ると、

企業が見ている景色と、NPOが見ている景色は大きく異なることに気が付く。企業の現場では、女性管理職比率や役員登用、ダイバーシティ計画の策定といった数値目標が語られる。いわゆる「ガラスの天井」をどう突破するか。意思決定層に女性を増やすことが急務だ。一方、NPOが向き合っているのは、DVや性暴力、困窮、子育ての孤立といった切迫した現実である。経済的・社会的に追い込まれた女性をどう支えるかという、足元の問題だ。

一見、距離のある二つの課題。だが、それらは根でつながっている。意思決定の場に女性が少なければ、支援制度の設計にも偏りが生じる。困窮や暴力の問題が放置されれば、挑戦できる女性の母数も減る。ガラスの天井と、足元の困難は、同じ構造の異なる表れにすぎない。それにもかかわらず、企業とNPOはこれまで十分に交流する機会がなかった。

「（経済を回す）営利セクターと、（活動に熱心な）非営利セクターに壁があることが、一番の課題でした」。YUIみらいプロジェクトに応募したきっかけについて、菅原さんはそう話す。それぞれが懸命に取り組んでいるにもかかわらず、課題は北海道全体の構造として共有されていない。だからこそ必要なのは、分断を越え、セクター同士をつなぐアプローチではないか。ジェンダー・コレクティブ北海道は、その想いから始まった。

分断ではなく、横断へ

ジェンダー・コレクティブ北海道では、まずはセクターごとに学びを深めた。企業には企業の言葉で、NPOにはNPOの文脈で、ユースにはユースの感覚で。まずは安心して語れる場を整えることから始めた。そして2年目は、あえて境界を越え、セクターを混ぜたアクション創出ワークショップを開催し、企業担当者と若者、NPOと行政が同じテーブルについた。

ユースコミュニティを担当している橋本さんは、セクターを越えた対話の難しさについてこう振り返る。「大人とユースが同じテーブルにつく機会をつくったのですが、ユースが見ているジェンダー課題と、大人が見ている課題の間に、



最終発表会団体報告の様子



NPOと企業が一緒に取り組んだワークショップ



NEW RAIL AWARDの様子



ジェンダー平等アクション創出ワークショップ

想像以上に大きなギャップがありました。対話の後、ユースに感想を聞いたところ、参加者からこんな言葉が返ってきたという。「ギャップが大きすぎて、大人との対話に絶望しました」。ユース同士の対話は前向きに進んでいた。それだけに、セクターを越えた瞬間に生じた溝の深さは衝撃だった。「若者からは『企業はジェンダー課題に本気で向き合っていないのではないか』という声も上がりました。一方で企業側も、どう振る舞えばよいのかわからず、戸惑う様子がありました」

菅原さんも、事業を進める中で葛藤があったと明かす。「この取り組みを、長年現場で活動してきた支援団体の方々がどう受け止めるだろうか、ということは常に考えていました。広げていくことは大切ですが、その過程で誰かを置き去りにしていないか、という視点は持ち続けたいと思っています」

そんな課題を前にしていた時、地域で長年社会活動を担っている団体から励ましを受けた。「私たちも、何十年もかけて社会課題に取り組んでいる。そんなに簡単に理解してもらえないわけじゃないじゃない」。軽やかな笑い声に、肩の荷が降りた気がしたと振り返る。「いろいろな立場の人を巻き込み、ジェンダーの取り組みを広げていくことは必要です。でも、その広がりや表面的なものになっていないか、女性たちの声が薄まっていないかは、きちんと問い続ける役割を担いたい



さっぽろ青少年女性活動協会の橋本彩加さん

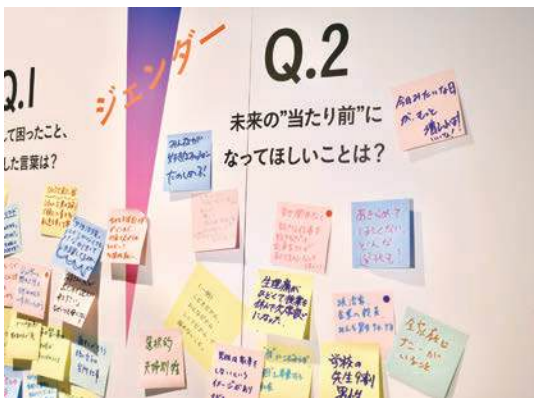
と思っています。時間はかかるけれど、コツコツと続けていくことが大切だと思います」

小さなレールを、北海道全体へ

次は、これを一過性のイベントで終わらせず、北海道全体でジェンダーアクションが自発的に生まれ続ける「エコシステム」を築くことを目指す。そのために、三つの挑戦を掲げている。

第一に、担い手の育成。セクターを横断できる人材を増やし、企業、NPO、行政、ユースをつなぐハブを育てていく。

第二に、インパクトの可視化。取り組みが社会にどのような変化をもたらしているのかを測る評価ツールを整備し、ジェンダー施策を「善意」ではなく



NEW RAIL AWARDの参加者や通行人が想いを寄せた付箋

「社会的価値」として理解される仕組みへと転換する。

第三に、ジェンダーファイナンスの構築。価値ある取り組みに資金が循環する仕組みを整え、評価と成果の見える化を通じて、投資や寄付の流れを生み出す。ジェンダーをコストではなく、未来への投資として位置づけるためだ。

北海道にはすでに、力強い実践がある。各地域で芽吹くアクション。企業の中で静かに進む制度改革。若者同士の対話。札幌だけでなく、過疎地も含めた北海道全体へ。企業も、学生も、自治体も、個人も、立場を越えてつながることで、孤立していた小さな取り組みは線となり、やがて面へと広がっていく。その接統点から、新しい北海道の道筋が描かれ始めている。